

2006年8月

全国の50～79歳の男女780名に聞いた 『シニアの情報機器使用に関する調査』

～パソコンを使用していないシニアの44%が「今後使ってみよう」と考えている～

第一生命保険相互会社（社長 斎藤 勝利）のシンクタンク、（株）第一生命経済研究所（社長 石嶺 幸男）では、全国に居住する50～79歳の男女780名を対象に、標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

この程、その調査結果がまとまりましたのでご報告いたします。

＜調査結果のポイント＞

携帯電話とパソコンの使用割合、使用目的、役立ち度（P2～3）

- 携帯電話の使用割合は58%、パソコンは51%と、今やシニアの半数以上が使用している。
- 携帯電話、パソコンともに、9割以上が「仕事以外の目的」で使用している。
- シニアの92%が携帯電話を、88%がパソコンを、実際に役立っていると感じている。

メールやホームページ(HP)接続の頻度とHP接続の目的（P4～5）

- 携帯電話やパソコンでのメール、パソコンでのHP接続を1日1回以上行っているヘビーユーザーが3割弱もいる。その一方で、携帯電話でのHP接続は少ない。
- 最も多い目的は、携帯電話、パソコンともに「趣味・レジャーに関する情報を調べる」ため。

メールの相手別頻度とメールによって親密になった相手（P6～7）

- 50～64歳のシニアは、「配偶者」や「仕事関係の人」との携帯電話メールが多い。
- 65～79歳のシニアは、「趣味・サークルや学校時代の友人」とのパソコンメールが多い。
- 親密になったのは、携帯電話では「別居の子ども」、パソコンでは「趣味・サークル等の友人」。

携帯電話やパソコンを使わないことによる不便さと今後の使用意向（P8～9）

- 携帯電話では、「家族や友人から連絡を取りづらくなった」と言われた(29%)が最も多い。
- パソコンでは、「欲しい情報を手に入れにくくなった」(28%)が多い。
- 携帯電話、パソコンともに共通して多いのは、「時代に取り残されていると感じた」。
- 今後使ってみよう割合は、携帯電話31%、パソコン44%と、パソコンへの需要の方が高い。

情報機器が自分や社会に及ぼす影響（P10～11）

- 自分に対しては、「情報を得やすくなる」(91%)、「知識が増える」(75%)などのメリットが多い一方で、「個人情報流出への不安が増える」(73%)のようなデメリットもある。
- 社会に対しては、「生活が便利になる」(88%)、「災害時に役立つ」(83%)、「情報の地域差が小さくなる」(74%)などのメリットが多い一方で、「有害な情報が氾濫する」(71%)、「犯罪が増える」(68%)などのデメリットもある。

＜お問い合わせ先＞

(株)第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部
研究開発室 広報担当（丹野・新井）
TEL. 03-5221-4771
FAX. 03-3212-4470

【アドレス】<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi>

☆本報告書の詳細は、当研究所から隔月発行している『ライフデザインレポート』9-10月号（9/1発行）に掲載予定です。レポートご希望の方は、左記の広報担当、またはホームページからお申し込みください。

《アンケート調査の実施概要》

1. 調査地域と対象 全国に居住する 50～79 歳の男女
※本調査では、50～79 歳をシニアと定義し、一般的に
高齢者と言われている 65 歳以上の層（65～79 歳）と、
それ未満の層（50～64 歳）の 2 つに分けて分析した。
2. サンプル数 780 名
3. サンプル抽出方法 第一生命経済研究所生活調査モニター
4. 調査方法 質問紙郵送調査法
5. 実施時期 2005 年 11 月
6. 有効回収数(率) 731 名 (93.7%)
7. 回答者の属性

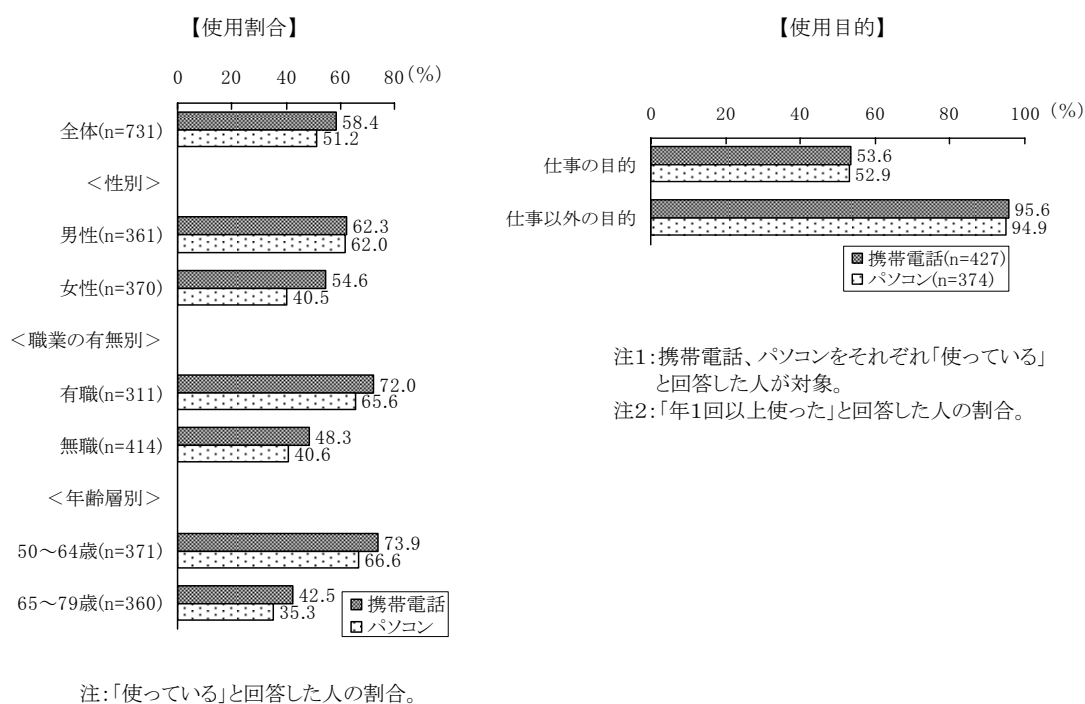
(単位:人)

	50～64 歳		65～79 歳		合計	
	n	%	n	%	n	%
男性	178	24.4	183	25.0	361	49.4
女性	193	26.4	177	24.2	370	50.6
合計	371	50.8	360	49.2	731	100.0

携帯電話とパソコンの使用割合と使用目的

携帯電話 58%、パソコン 51%と、どちらも半数以上が使用している。
 携帯電話、パソコンともに、使用割合は女性よりも男性の方が高い。
 携帯電話、パソコンともに、9割以上が仕事以外の目的で使用している。

図表1 携帯電話・パソコンの使用割合(性別、職業の有無別、年齢層別)と使用目的



現在、携帯電話、およびパソコンを使っているかどうか、をたずねました。

その結果、全体では、携帯電話は58.4%、パソコンは51.2%と、50歳以上のシニアの半数以上がこれらの情報機器を使用していることがわかりました。

性別にみると、携帯電話、パソコンともに、使用割合は女性よりも男性の方が高い結果になりました。特に、パソコンにおける男女差は大きく、その差は20ポイントを超えています。

職業の有無別にみると、携帯電話、パソコンともに、使用割合は無職よりも有職のシニアの方がそれぞれ25ポイント程度高いことがみてとれます。

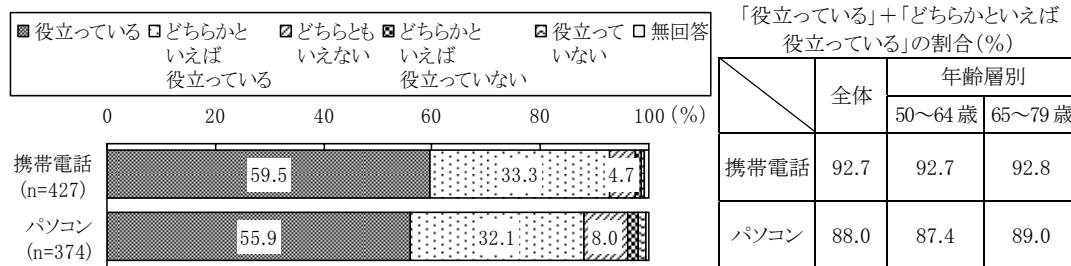
年齢層別にみると、年代が高いシニアよりも低いシニアの方が、携帯電話とパソコンそれぞれの使用割合は高くなっています。

また、携帯電話やパソコンを使っているシニアに対し、この1年間で仕事と仕事以外、どちらの目的で使ったか、をたずねました。その結果、「仕事の目的」で年1回以上使った割合は、携帯電話(53.6%)、パソコン(52.9%)ともに過半数を占めていました。一方、「仕事以外の目的」で年1回以上使った割合は、携帯電話、パソコンともに約95%でした。

携帯電話とパソコンの役立ち度

携帯電話には 92%、パソコンには 88%と、どちらも9割前後が役立っていると感じている。また、役立っていると感じている割合に年齢差はなく、それらを使用しているシニアのほとんどがプラスに感じている。

図表2 携帯電話・パソコンの役立ち度(年齢層別)



携帯電話やパソコンを使っているシニアに対して、それらが自分の生活にどの程度役に立っているか、をたずねました。

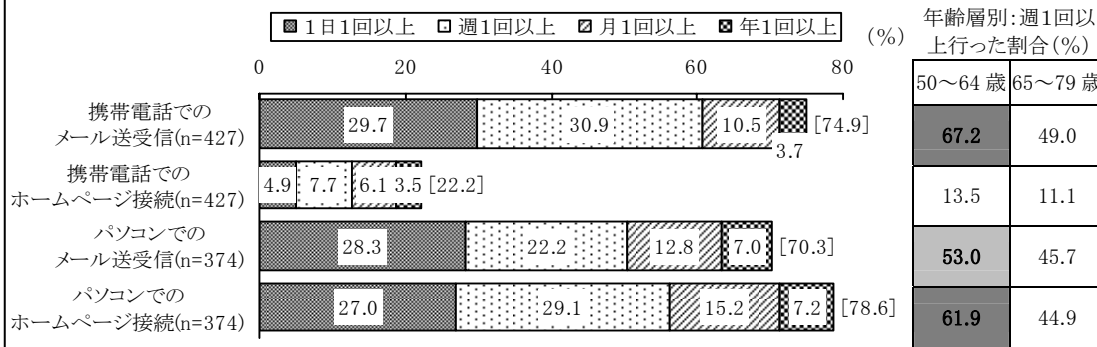
その結果、全体をみると、携帯電話、パソコンともに「役に立っている」割合は6割弱、「どちらかといえば役に立っている」割合は3割強で、両者をあわせた割合は、携帯電話92.7%、パソコン88.0%と、ともに9割前後でした。

これは、年齢層別でみてもほとんど差がありません。つまり、年齢を問わずにほとんどのシニアは、携帯電話やパソコンが生活に役立っていると考えていることがわかりました。

メールやホームページ接続の頻度

携帯電話やパソコンでのメール送受信、パソコンでのホームページ接続については、1日1回以上行っているヘビーユーザーが3割弱もいる。その一方で、携帯電話でのホームページ接続の頻度は低い。

図表3 メール送受信・ホームページ接続の頻度（年齢層別）



注1: 携帯電話、パソコンをそれぞれ「使っている」と回答した人が対象。

注2: 年齢層別の表では、10ポイント以上高い項目に濃い網かけ、5ポイント以上高い項目に薄い網かけ。

携帯電話、パソコンを使っているシニアに対して、メール送受信、およびホームページ接続をこの1年間にどの程度行ったか、をたずねました。

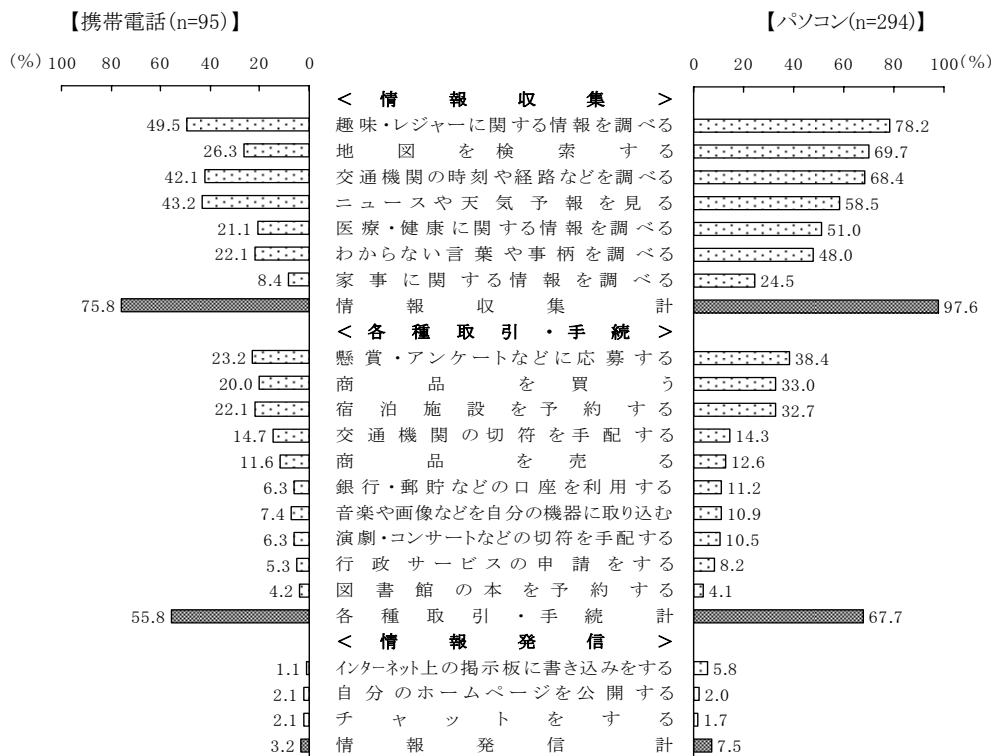
その結果、年1回以上（「1日1回以上」から「年1回以上」の合計）行った人の割合をみると、「携帯電話でのメール送受信」「パソコンでのメール送受信」「パソコンでのホームページ接続」の割合は、いずれも7割台でした。また、これら3つを週1回以上（「1日1回以上」と「週1回以上」の合計）行った割合は過半数、「1日1回以上」行った割合はそれぞれ3割弱もあり、ヘビーユーザーも少なくないことがわかりました。また、これら3つに比べて、「携帯電話でのホームページ接続」の頻度は低いことがみてとれます。

週1回以上行った割合を年齢層別にみると、いずれも50～64歳の年代が低いシニアの方が高いことがみてとれます。このことから、年代が低いシニアの方が、より日常的にメールやインターネットを活用しているといえます。

ホームページ接続の目的

携帯電話、パソコンともに、「趣味・レジャーに関する情報を調べる」が最も多く、携帯電話では約半数、パソコンでは8割近くが行っている。その一方で、掲示板への書き込みなどの『情報発信』はまだ少ない。

図表4 ホームページ接続の目的＜複数回答＞



注:携帯電話、パソコンでそれぞれホームページ接続を「年1回以上」行った人が対象。

前頁で携帯電話やパソコンでのホームページ接続を年1回以上行ったと回答したシニアに対して、具体的に何を行ったか、を複数回答でたずねました。

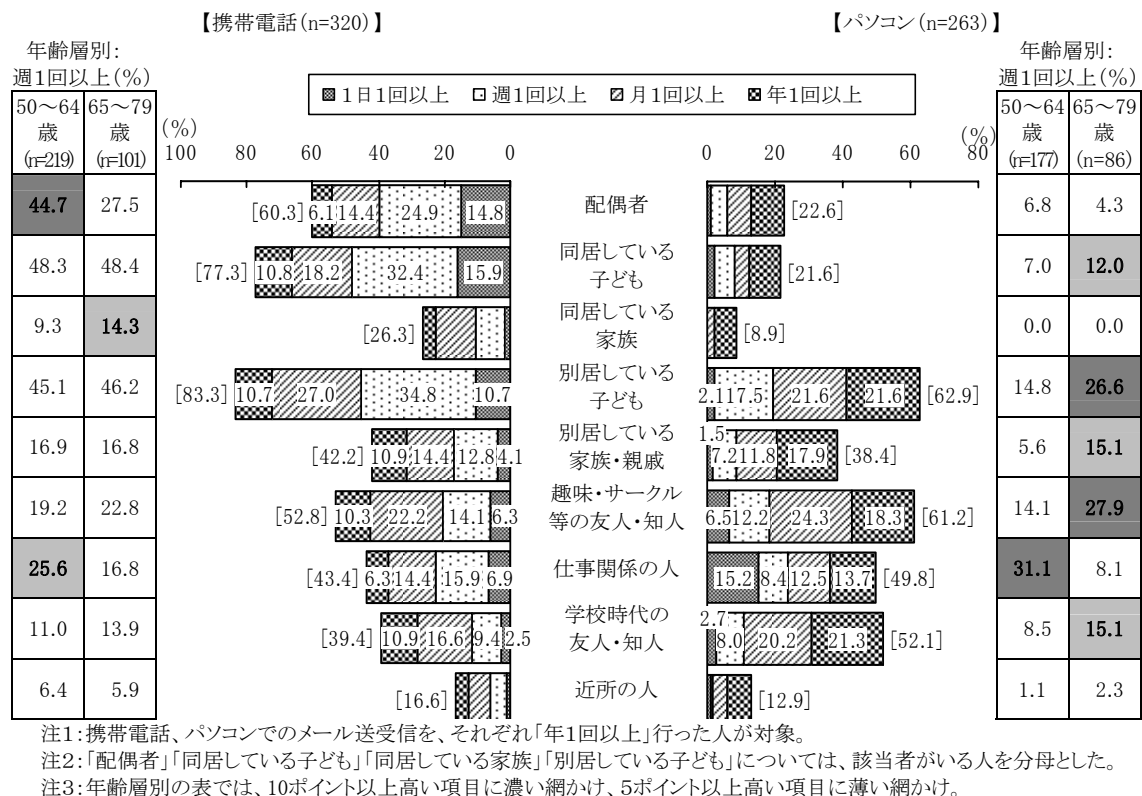
携帯電話についてみると、『情報収集』に関しては、「趣味・レジャーに関する情報を調べる」(49.5%)が最も多く、次いで「ニュースや天気予報を見る」(43.2%)、「交通機関の時刻や経路などを調べる」(42.1%)も4割台となっています。『各種取引・手続』に関しては、「懸賞・アンケートなどに応募する」(23.2%)が最も多く、次いで「宿泊施設を予約する」(22.1%)、「商品を買う」(20.0%)といった結果になりました。

次に、パソコンについてみると、『情報収集』に関しては、携帯電話と同様に「趣味・レジャーに関する情報を調べる」(78.2%)が最も多く、次いで「地図を検索する」(69.7%)、「交通機関の時刻や経路などを調べる」(68.4%)が7割弱となっています。『各種取引・手続』に関しては、上位3項目は携帯電話と同じく、「懸賞・アンケートなどに応募する」(38.4%)、「商品を買う」(33.0%)、「宿泊施設を予約する」(32.7%)でした。その一方で、若い世代で盛んな掲示板への書き込みやホームページの公開などの『情報発信』については、携帯電話、パソコンともにまだ少数派であることがみてとれます。

メールの相手別頻度

携帯電話は同別居に関係なく子どもと、パソコンは別居の子どもや友人・知人とが多い。年齢層別では、65～79歳の年齢の高いシニアは、別居の子どもや趣味・サークルの友人・知人とのパソコンメールが特に多い。

図表5 メール送受信の相手別頻度(年齢層別)



携帯電話、パソコンでのメール送受信を年1回以上行ったと回答したシニアに対して、この1年間でそれぞれどのような相手とどの程度行っただろうか、をたずねました。

携帯電話でのメールの相手をみると、「同居している子ども」や「別居している子ども」の割合(年1回以上:77.3%・83.3%、週1回以上:48.3%・45.5%)が特に高く、同別居を問わず子どもと携帯電話でメール交換するシニアが多いことが示されています。

一方、パソコンでのメールの相手をみると、やはり「別居している子ども」(年1回以上:62.9%、週1回以上:19.6%)が多い一方で、「趣味・サークル等の友人・知人」(年1回以上:61.2%、週1回以上:18.7%)もこれに並んでいます。

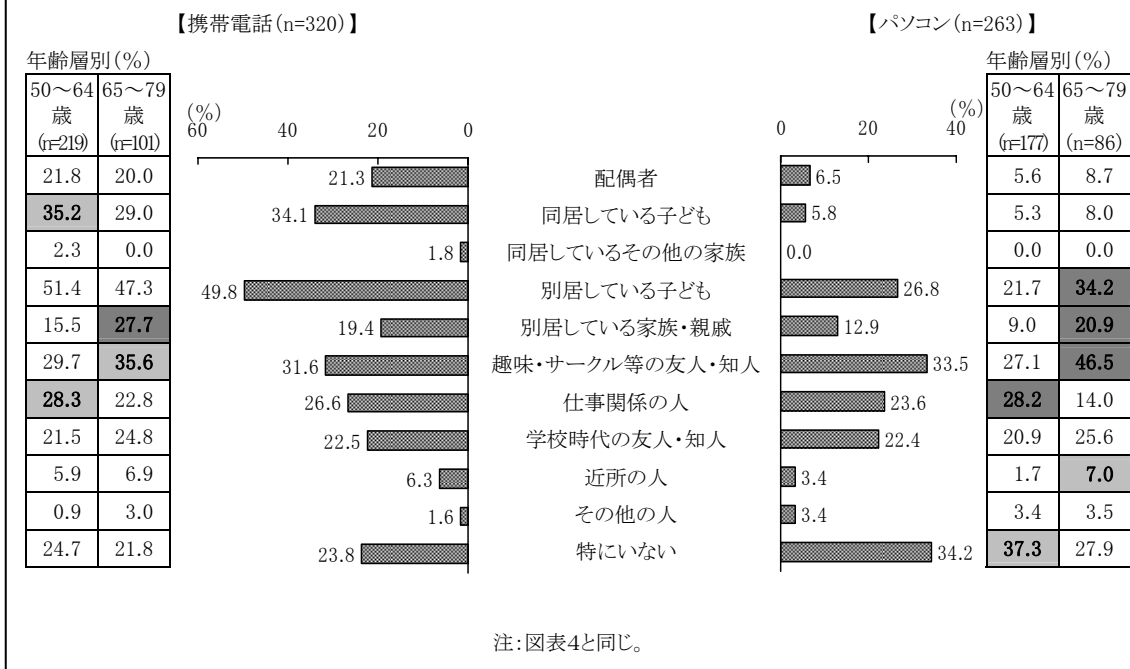
年齢層別にみると、携帯電話でのメールを週1回以上行っただ割合は、「配偶者」と「仕事関係の人」では50～64歳のシニアの方が高くなりましたが、それ以外ではほとんど差がありませんでした。また、パソコンでのメールを週1回以上行っただ割合は、50～64歳のシニアの方が高いのは「仕事関係の人」で、それ以外は65～79歳の方が高いことがみてとれます。

これらから、メールの頻度は全体的には50～64歳のシニアの方が多い反面、相手別にみると仕事関係が配偶者が多くだけで、仕事を引退した世代の方が、メール、特にパソコンのメールは必要に迫られてではなく、楽しみのために使っているのではないかと考えられます。

メールによって親密になった相手

携帯電話では「別居している子ども」(49%)、パソコンでは「趣味・サークル等の友人・知人」(33%)が多い。全体的に、携帯電話のメールの方が、家族や友人との親密度を高めている。

図表6 メール送受信によって親密になった相手(年齢層別)＜複数回答＞



携帯電話、パソコンでのメール送受信を年1回以上行ったと回答したシニアに対して、それらを行うことによって親密になったと思う相手は誰か、を複数回答でたずねました。

携帯電話でのメールによって親密になった割合が最も高いのは、「別居している子ども」(49.8%)で、次いで「同居している子ども」(34.1%)、「趣味・サークル等の友人・知人」(31.6%)でした。「配偶者」や「同居している子ども」と親密になった割合は、メールの頻度の多さに比べると低いことがみてとれます。また、別居の家族や友人等とのメールは親密度を高めるのに大きな役割を果たしているのに対し、同居の家族とのメールは実用的な連絡手段という意味合いが濃いことがうかがわれます。一方、パソコンでのメールによって親密になった相手も、「別居している子ども」(26.8%)の割合が高い結果になりましたが、「趣味・サークル等の友人・知人」(33.5%)はこれをさらに上回っていました。

携帯電話とパソコンを比較すると、メールを通じて親密度が高まった割合は、「趣味・サークル等の友人・知人」を除き、携帯電話の方が高い傾向にあります。つまり、全体的には、携帯電話でのメールの方が、家族や友人との親密度を高めているといえます。

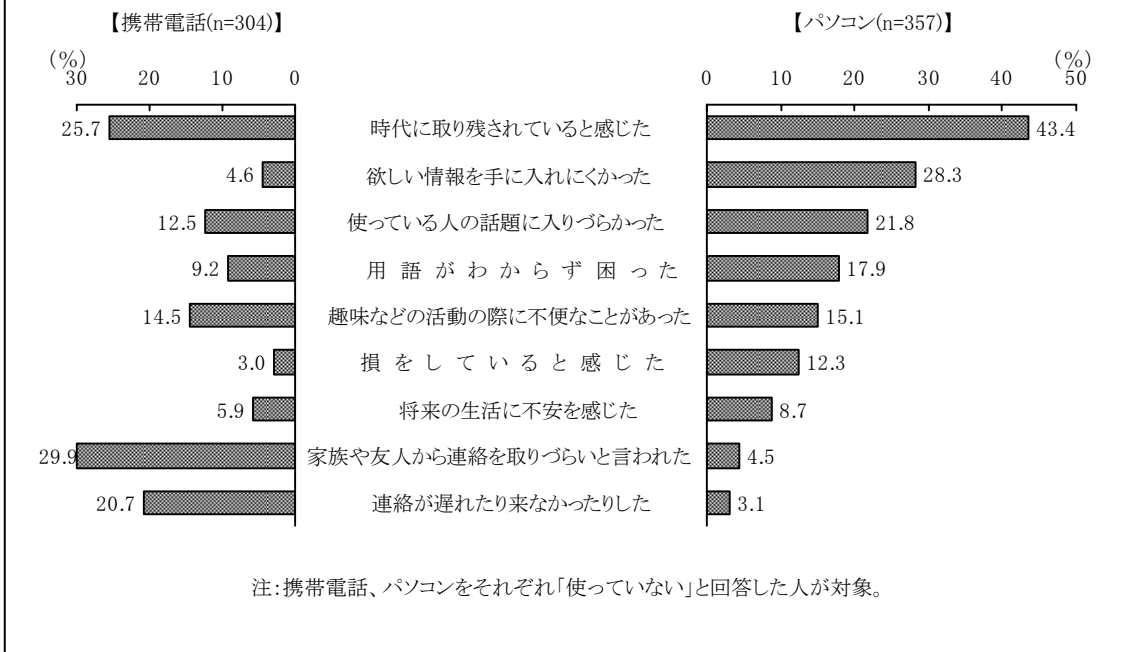
年齢層別にみると、50～64歳の人は、携帯電話やパソコンのメール送受信で「仕事関係の人」と、携帯電話のメール送受信で「同居している子ども」と親密になった割合が高い一方で、65～79歳の人は、携帯電話やパソコンのメール送受信で「別居しているその他の家族・親戚」「趣味・サークル等の友人・知人」と、パソコンのメール送受信で「別居している子ども」「近所の人」と親密になった割合が高いことがわかりました。

携帯電話やパソコンを使わない不便さ

携帯電話、パソコンともに多いのは、「時代に取り残されていると感じた」。

また、携帯電話では「家族や友人から連絡を取りづらいと言われた」(29%)、パソコンでは「欲しい情報を手に入れにくかった」(28%)も多い。

図表7 携帯電話・パソコンを使わないことによる不便・不利な体験＜複数回答＞



携帯電話、およびパソコンを使っていないシニアに対して、それらを使わないことによる不便・不利な体験をしたことがあるか、を複数回答でたずねました。

携帯電話を使わないことによる不便・不利な体験では、割合が高い順に「家族や友人から連絡を取りづらいと言われた」(29.9%)、「時代に取り残されていると感じた」(25.7%)、「連絡が遅れたり来なかったりした」(20.7%)となっていました。

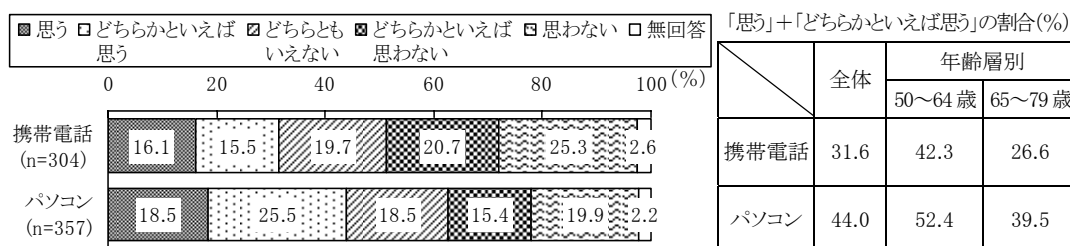
一方、パソコンを使わないことによる不便・不利な体験では、「時代に取り残されていると感じた」(43.4%)の割合が最も高く、次いで「欲しい情報を手に入れにくかった」(28.3%)、「使っている人の話題に入りづらかった」(21.8%)となっています。

つまり、携帯電話やパソコンを使用していないと、意識の面では時代に取り残されたと感じ、実質的な面では携帯電話の場合は周囲とのコミュニケーションに、パソコンの場合には情報入手に支障が生じることがあるといえます。

携帯電話やパソコンを今後使ってみたいと思うか？

今後使ってみたいと回答した割合は、携帯電話 31%、パソコン 44%と、パソコンに対する需要の方が高い。年齢層別では、50～64 歳(52%)の過半数、65～79 歳(39%)でも約4割がパソコンを使いたいと考えている。

図表8 携帯電話・パソコンを今後使ってみたいと思うか(年齢層別)



注:携帯電話、パソコンをそれぞれ「使っていない」と回答した人が対象。

携帯電話、およびパソコンを使っていないシニアに対して、それらを今後使ってみたいと思うかどうか、をたずねました。

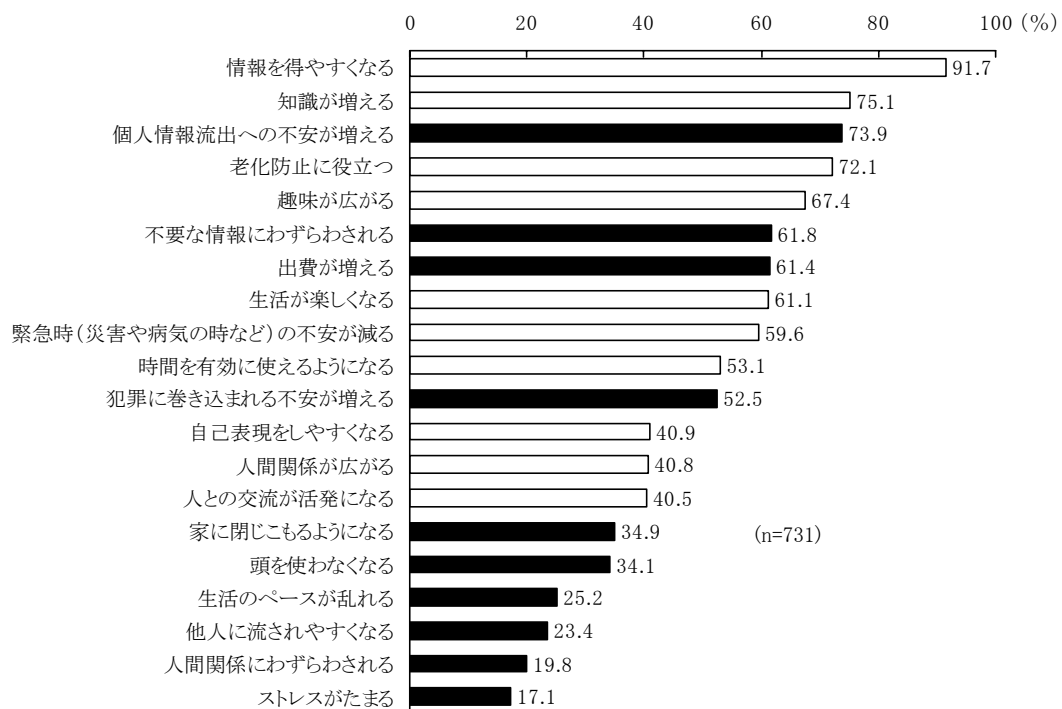
その結果、今後使ってみたいと思う（「思う」と「どちらかといえば思う」の合計）割合は、携帯電話では31.6%、パソコンでは44.0%と、パソコンに対する需要の方が高いことがわかりました。

年齢層別にみると、携帯電話、パソコンともに、今後使ってみたいと思う割合は、50～64歳の年代が低いシニアの方が、65～79歳の年代が高いシニアを大きく上回っています。また、パソコンに関しては、50～64歳では過半数、65～79歳でも約4割が今後使ってみたいと考えており、シニアの間でも需要は非常に高いことがみてとれます。

情報機器が自分に及ぼす影響

「情報を得やすくなる」(91%)が最も多く、次いで「知識が増える」(75%)のように、メリットを強く意識している。しかし、「個人情報流出への不安が増える」(73%)のように、デメリットを意識しているシニアも多い。

図表9 携帯電話やパソコンなどの情報機器が自分に及ぼす影響



注1:「思う」と「どちらかといえば思う」の合計。

注2:白色はプラスの影響に関する項目、黒色はマイナスの影響に関する項目。

携帯電話やパソコンなどの情報機器を使うことは、自分にどのような影響を及ぼすと思うか(使っている人は実際に影響があるか、使っていない人はもし使ったら影響があると思うか)、をたずねました。

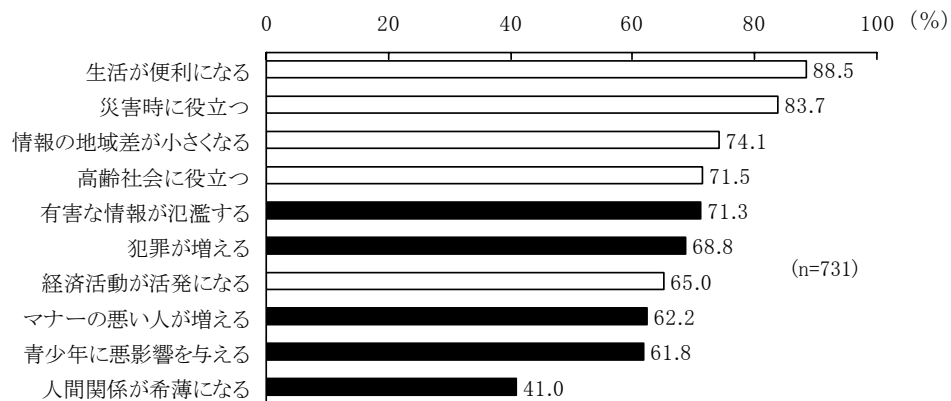
その結果、それぞれの項目に対し、そう思う(「思う」と「どちらかといえば思う」の合計)割合が最も高いのは「情報を得やすくなる」(91.7%)で、次いで「知識が増える」(75.1%)、「個人情報流出への不安が増える」(73.9%)、「老化防止に役立つ」(72.1%)が7割台と、上位には“個人情報流出への懸念”を除いてプラスの影響に関する項目の方が多いことがみてとれます。これらから、全体的には、情報機器を使用することによる自分への影響を肯定的にとらえていることがわかります。

また、年齢層別にみると、全体的には、65～79歳よりも50～64歳のシニアの方がプラス項目の割合は高く、マイナス項目の割合は低い傾向があります(図表省略)。

情報機器の普及が社会に及ぼす影響

第1位「生活が便利になる」(88%)、第2位「災害時に役立つ」(83%)
第3位「情報の地域差が小さくなる」(74%)などのメリットが多い。
デメリットとして「有害な情報が氾濫する」「犯罪が増える」も7割前後と多い。

図表 10 携帯電話やパソコンなどの情報機器の普及が社会に及ぼす影響



注:図表9と同じ。

最後に、携帯電話やパソコンなどの情報機器が普及することは、社会にどのような影響を及ぼすと思うか、をたずねました。

その結果、そう思う（「思う」と「どちらかといえば思う」の合計）割合が高い上位4項目は、「生活が便利になる」（88.5%）、「災害時に役立つ」（83.7%）、「情報の地域差が小さくなる」（74.1%）、「高齢社会に役立つ」（71.5%）といったプラスの影響に関する項目が占めました。

また、マイナスの影響に関する項目として、「有害な情報が氾濫する」（71.3%）、「犯罪が増える」（68.8%）が次いで多く、これら以外にも、「マナーの悪い人が増える」（62.2%）、「青少年に悪影響を与える」（61.8%）は6割を超えていました。

《研究員のコメント》

この調査では、情報機器、特に、携帯電話とパソコンがシニアの生活に与えるプラスとマイナスの影響について、意識面と実態面から探りました。

情報機器を使用しているシニアに与えるプラスの影響としては、「情報を得やすくなる」「生活が便利になる」などの一般的な効用のほか、「高齢社会に役立つ」「老化防止に役立つ」といった高齢者の生活に関連のある効用を多くのシニアが感じていました。また、それとは逆にマイナスの影響もあり、個人情報流出、ネット犯罪などのセキュリティ面に対する不安や、情報の洪水に埋もれることへの懸念は、多くのシニアが抱いています。情報機器が多くのシニアに受け入れられるためには、それらのメリットを強調するだけでなく、デメリットを少なくし、不安や不満を解消することも必要です。

情報機器を使用しているシニアの多くは、趣味の仲間とメールを通じて親交を深めたり、ホームページで趣味の情報を得たりなど、趣味に関するネットワーク構築や情報収集に活用しています。つまり、情報機器は、定年や子どもの巣立ちなどで生きがいを失ってしまいがちなシニアにとっての、新たな生きがいづくりに大いに貢献しています。

また、人間関係の面では、趣味の関係以外にも、メール等を活用して友人・知人や家族・親戚との親密度を高めています。中には、“情報機器の普及が人間関係を希薄にする”といった否定的なとらえ方をする人もいますが、人間関係構築の一助となっていることは間違いありません。

これらから、社会との接点が少なくなりがちなシニアにとって、情報機器は人間関係を広げ、深める上で有用である、と考えられます。特に、別居している子どもとメールを通じて親密になったシニアが多いという結果は、離れて住む子どもとの心理的距離を情報機器が縮めていることを示しています。

その一方で、情報機器を使用していないシニアは、こうしたメリットを享受できないだけでなく、不便さや不利益を被ることすらあります。情報機器を使わないことで連絡が滞ったり、欲しい情報が手に入りにくい経験をしたシニアは少なくありません。情報機器を使用しない人は、コミュニケーションや情報入手が妨げられている、という結果は、本調査で改めて浮き彫りになった「デジタル・ディバイド」(情報格差)の一つです。

また、全体的には、65歳未満のシニアよりも、65歳以上の高齢なシニアの方が、情報機器の使用率や使用意向は低く、情報機器が自分に及ぼす影響も否定的にとらえています。この背景には、情報機器の活用能力や学習機会などの差がある、と考えられます。

しかしながら、65歳以上のシニアの方が、相手によってはメールを頻繁に使って親密度を深めていたり、情報機器を使用することで病気や災害の時などの不安が減ると考えていたりします。人間関係の維持・形成や、安全確保などの面で情報機器をもっと活かしたいというニーズは、潜在的にはあるのかもしれませんが。

将来的には、“団塊の世代”を中心とした世代がより高齢になるにつれて、情報機器は年配者の間でもさらに普及していくと考えられます。今後、シニアの情報機器使用の状況や意向がどのように変化していくのか、注意深く見守りたいと思います。

(研究開発室 副主任研究員 水野 映子)